

仙台政府倉庫建造物 調査報告書

2009年3月

仙台市教育委員会

序 文

仙台市宮城野区東仙台は、現在では新興住宅地が立ち並ぶ地区となりましたが、かつては広い水田がみられる仙台平野の穀倉地帯でした。仙台政府倉庫はここ東仙台に、米穀の安定供給を図るために昭和11年に建設されたものです。第2次世界大戦中は戦時食糧の備蓄倉庫に、戦後は進駐軍に利用されました。倉庫の老朽化や周辺環境の変化等により平成17年には業務が停止し、約70年の使命を終え、解体されることになりました。跡地については、今後、青葉区追廻地区住民の移転先として整備される予定です。仙台政府倉庫は、これまで数度の改変がみられるものの、伝統的工法と近代的な建築技術が融合された近代化遺産であり、かねてより文化財的価値の高さが指摘されてきましたが、このたびの解体に伴い、仙台市では建造物の記録保存調査を実施いたしました。本報告書はその成果です。本書が市内における近代化遺産理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、このたびの調査、報告書刊行に際しまして、関係各位の皆様方から懇切丁寧なご指導、ご教示を賜りましたことを心より御礼申し上げます。

平成21年3月

仙台市教育委員会

教育長 荒井 崇

例　　言

1. 本書は仙台政府倉庫解体に伴う、記録保存調査報告書である。
2. 本書における担当は次のとおりである。
 - ・仙台政府倉庫調査の概要：伊藤優（仙台市文化財課）
 - ・仙台政府倉庫の建築的特徴：伊藤剛子、西大立日祥子、大沼正寛（まち遺産ネット仙台）
 - ・実測図図面編集：間口重樹（東北歴史博物館）
 - ・写真図版編集：白崎恵介（宮城県教育庁文化財保護課）

本書の編集は各担当者と協議のうえ、伊藤優が担当した。
3. 本書使用の地形図は国土地理院発行2万5千分の1「仙台東北部」（平成20年）である。
4. 本書に関わる図面、写真等の資料は仙台市教育委員会が保管しているので、活用されたい。

目　　次

序　　文

例　　言

目　　次

1 仙台政府倉庫調査の概要	2
2 仙台政府倉庫の建設経緯と建築的特徴	4
3 図　　版	
・位置図、記録写真	6
・実測図	17

1 仙台政府倉庫調査の概要

1. 調査に至る経緯

(1) 調査に至る経過

宮城野区新川に所在する仙台政府倉庫は昭和11年に竣工し、備蓄米倉庫として使用されてきたが、老朽化に伴い、平成17年に廃止された。その間数度の改変があるものの、伝統的工法と近代的な建築技術が融合された近代建造物の特色が色濃く残されており、「宮城の近代化遺産」(平成14年3月発行)にて詳細調査の対象としてその文化財的価値が報告されている。敷地と建物は平成17年の業務停止後、青葉区の追廻地区住民の集団移転先とすることが決定され、平成20年6月初旬には解体されることになったため、記録保存調査を実施したものである。

昭和11年	政府倉庫として竣工、備蓄米倉庫として使用
平成17年3月	業務停止
平成17年7月	文化財課として、保存活用を図ることも視野に入れて、文化財収蔵庫候補地として要望
平成17年10月	仙台市において、当該所在地を青葉山公園整備事業に伴う集団移転候補地として優先して検討する旨の確認がなされた
平成19年1月	仙台市の追廻地区住民の集団移転先とすることが決定
平成20年2月12日	市長記者会見で、倉庫を解体する方針である旨を回答
平成20年3月	仙台市に移管
平成20年5月	記録保存調査計画作成
平成20年5月1日	まち遺産ネット仙台が保存・活用についての要望書を市長に提出
平成21年5月19日	まち遺産ネット仙台が「仙台政府倉庫についての要望書」を市長に提出
平成20年5月19日	仙台市文化財保護審議会 調査事前指導
平成20年5月20日	建造物調査（約8日間）
～7月4日	
平成20年9月6日	部材等の一部を仙台市歴史民俗資料館資料として保管
平成20年12月	建造物実測図面、記録写真、史・資料の取りまとめ終了

(2) 調査要項

- ・調査主体：仙台市文化財課
- ・調査指導：仙台市文化財保護審議会
- ・調査協力：農林水産省東北農政局、仙台市建設局青葉山公園整備室、宮城県教育庁文化財保護課、東北歴史博物館、まち遺産ネット仙台
- ・調査者：渡部紀、小泉博明、佐々木仄、伊藤優（仙台市文化財課）
白崎恵介（宮城県教育庁文化財保護課）
岡口重樹（東北歴史博物館）
大沼正寛、伊藤則子（まち遺産ネット仙台）

(3) 調査内容

平成20年5月19日	仙台市文化財保護審議会事前指導
5月20日 ～5月23日	立面、断面、架構、施設配置、各面作成、写真撮影
6月12日 ～6月13日	屋根構造調査
6月23日 7月4日	壁構造調査

2. 調査対象概要

土地

- ① 所 在 宮城野区新田二丁目301番1 外3筆
- ② 地 目 宅地
- ③ 面 積 約11,000m²
- ④ 用途地域 第1種住居地域

建物

- ① 構 造 木造平屋建 6棟 (2棟一組×3組)
- ② 用 途 政府倉庫 (倉庫12)
- 内訳: 低溫倉庫2、準低溫倉庫2、常温倉庫8
- ③ 面 積 6,426m² (1.071×6棟)

3. 参考文献一覧

- ・宮城県公文書館所蔵資料
 - ・昭和11年度「國立倉庫建築関係書類」配架番号0186
(内訳)
 - ①「國立倉庫設備要望書」 ②「建築用材の指定請願書」 ③「米穀倉庫敷地の選定」 ④「米穀倉庫建設承認」
 - ⑤「建設工事設計書、設計図」 ⑥「現地調査復命書」
 - ・昭和11年度「國立倉庫建築関係書類」配架番号0187
(内訳)
 - ①「鉄道引込線敷地買取費」 ②「倉庫・附屬倉庫建設工事請算書」 ③「倉庫賃貸借契約」 ④「國立米穀倉庫設計圖面」
 - ・『宮城食糧事務所の50年』宮城食糧事務所 (昭和59年)
 - ・『仙台政府倉庫のあらまし』農林水産省仙台食糧事務所 (昭和59年)
 - ・『宮城県の近代化遺産』宮城県教育委員会 (平成14年)

2 仙台政府倉庫の建設経緯と建築的特徴

■建設の経緯

大正時代、米価は豊凶に左右され、また穀機の対象ともなり、米騒動が起こるなど主食たる米をめぐる生活は極めて不安定であった。生活の安定と米価の急騰緩和を目的に、「米穀法」が制定されたのは大正10年（1921）のことである。このとき東京と、米の主要産地である酒田や新潟などには米穀事務所が設けられたが、仙台には設置されなかった。

昭和8年（1933）、「米穀統制法」の制定とともに仙台にもようやく米穀事務所が開設される（原町郡役所跡）。この開設と前後して、宮城県知事、仙台市長が、米穀倉庫の設置を国に対し再三要望を重ねた。その背景には、十分な産出がありながら集散地が遠いため競争力に欠ける県産米を、何とか全国規模の市場流通にのせようとする地元関係者の強い熱意があった。

中でも、仙台市長・渋谷徳三郎は、米穀事務所および米穀倉庫を建設の上、農林省に寄付すること、その経費は仙台市が負担することを英断し、いち早く農林大臣に申請した。国の施設でありながら、計画、費用のすべてを、地元自治体が担い実現したことは注目に値する。

当初、敷地の候補地は、東仙台と長町の2カ所あったが、県の調査の結果、長町には冠水の危険があると判断されたため、東仙台が選定された。選定が決まった段階で、東仙台土地区画整理組合128名の縦代10名が、農林大臣に対し陳情書を提出した。それには、海運、陸運どちらにも最適地であること、地盤強固で水害の恐れは絶対ないこと等、この地の立地の良さが早示された後、更に「地価ハ坪10円位ノ評価ナルモ組合ハ国立倉庫設立ノ趣旨ニ賛シ坪4円ニ提供スルモノトス」と記されている。倉庫を切望する人々が、破格の価格で土地を提供することを申し合わせたのだった。

このようにして、地元の人々の熱意が実り、仙台政府倉庫は、昭和11年（1936）4月20日に竣工した。

■配置構成

仙台政府倉庫の配置構成は次のようなものであった。まず切妻造・蔵入の倉庫を2棟連続させて一組とする。それが等間隔で三組横一列に並ぶ。そして更に、それと同配列のものが向かい合うという構成である。同種の倉庫群として現存する旧国立新屋倉庫（秋田市：現秋田公立美術工芸短期大学実習棟他）、および旧門司米穀倉庫（北九州市）は、個々の倉庫が横一列に建ち並ぶという構成であり、それらと比較すると、本倉庫群の配置構成は特徴的であったと言えよう。倉庫の列と列の間には、敷地の直ぐ北側を走る東北本線より、倉庫建設と同時に貨物用線路が引き込まれ、貨車から各倉庫へ荷を直接出し入れできる仕組みとなっていた。そのため主出入り口側にはプラットホームが設けられ、それを覆う下屋が各倉庫を繋ぐように付されていた。

敷地に関しては、建設時の配置図により、南西から北東へと走る東北本線に合わせて南北向きに地割りされた宅地が、倉庫建設以前に存在していたことが判明した。しかし本倉庫群は、それを無視するかのように棟方向を南北に揃えて整然と配置されており、周囲とは一線を画していた様相が窺える。

また、調査時には既に失われていたが、資料によると、倉庫群の他に木材置場、備入官舎、人夫詰所等の付属施設が設けられ、井戸も3カ所あったことなどが判明した。

■建物規模・構造

倉庫1棟当たりの大きさは、桁行32.62m、梁間16.40mで、倉庫内の容積は3,800立方メートルを超える、最大710トンの米袋を収容できた。建物高さは約11.5mで、平屋とはいって一般建物の2・3階分にも匹敵する。

建物の構造は木造で、基礎は鉄筋コンクリートで頑丈に造られていた。壁側の柱は140mm角の材を内外に二本抱き

合わせてボルト締めしたものが用いられ、壁全面にわたって筋かいがX字状に打たれていた。外壁は、下地は一般的な土壁同様に小舞搔きがなされた荒壁の上に、内側から木摺、アスファルト防水紙、メタルラスが仕組まれ、モルタルで仕上げがなされていた。

屋根は、外壁と一体的にモルタル塗とした下屋根の上に、更に木造の上屋根を載せるというものであった。防火を考慮した下屋根と雨仕舞を考慮した上屋根を二重に設け、屋根と屋根の間に風を通して換気も行うことができる。このような工夫は、元来土蔵ではよく見られるもので、それに倣ったものと思われる。上屋根は、解体時はセメント棟瓦葺であったが、当初は石締波形スレート葺であったことが、資料より明らかとなった。一方、下屋は、上屋根とは異なり亜鉛引波形鉄板葺であった。2棟の屋根が接合して生じる谷は、一般的に雨仕舞の難しい箇所である。その対策として本倉庫では、下地にアスファルトフェルト等の防水層を数層重ねて60mmコンクリートを打ち、その上にモルタルを塗った谷樋を設け、そこから雨水を垂鉛引鉄板製の落樋で排水管へと導くように設計されていた。小屋組はクイーンポストトラスで、側柱に加えて二列配された丸太の独立柱が、その大架構を支えていた。柱と梁とはそれぞれ方材で囲められ、要所には水平筋かいも設けられるという具合に、斜材や金物が多用され剛性を高めるための苦心の跡が窺えた。

連続する2棟は壁で完全に区切られていたが、壁の中央に設けられた大きな引き戸から行き来できるようになっていた。内壁は漆喰仕上げとし、荷摺木という丸太を半割にした材が、約350mm 間隔で壁全面に打ち付けられ、積荷が直接壁面に当たらないようになっていた。そして床は、割栗石を付き固めた上に厚さ120mm のコンクリートを打ち、更にモルタルを20mm 塗って仕上げ、相当の重量にも耐えうるものとなっていた。

その他、壁の上部・下部には、鉄扉を付した換気用の窓が規則的に穿たれ、また、出入り口には鼠返しの仕掛けが施される等、米穀倉庫ならではの工夫も窺うことができた。

■意匠

建物の性質上、どちらかといえば実用性が重視され、装飾的な要素は少なかった。加えて当時は、西欧に端を発した近代合理主義や機能主義の思想が、我が国の建築文化にも浸透しつつあった時期でもある。そのような中で、建物の隨所に設計者の意匠の感性を垣間見ることができた。

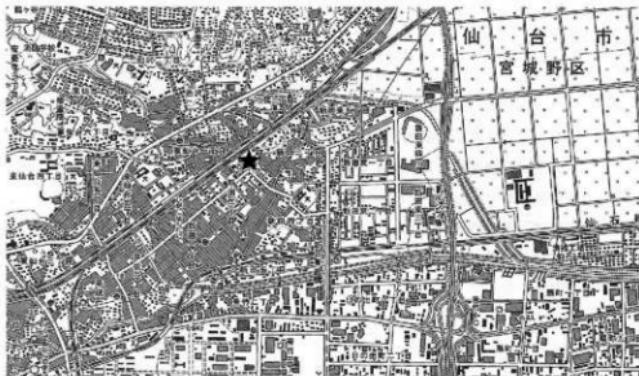
まず、妻壁には下屋根の勾配に沿った凸状の帯がモルタルで施され、外観上のアクセントとなっていた。このような妻壁の意匠や二重屋根の造り、そして開口部廻りの縁取りなどからは、土蔵の意匠を意識していたことが窺える。また、外壁には鉄筋コンクリート造のような太い柱と梁の姿が現れていたが、これらは、尖は構造とは無関係であり、モルタルで象られた装飾であることが判明した。この点からは、当時頑強な構造として既に普及していた、鉄筋コンクリートラーメン構造の意匠を意識していたことが窺える。

更に、地場の産業製品が用いられていたことも明らかとなった。腰壁の石材は、我が県の代表的な石材である秋保石であり、その表面ののみ跡や角部分を丸く彫り出した細工からは、職人の手業が偲ばれた。そして、排水管には、釉薬が施された堤焼の土管が使用されていた。

このように本倉庫群は、構造や意匠のいずれの面から見ても、土蔵という我が国古来の建築文化と、当時最新の技術や意匠の思想が融合し、更には地域の産業技術も活かされていた建物であったことが解る。すなわち、昭和前半ならではの米倉の姿を現代に伝えていた、貴重な近代化遺産であったと言ふことができよう。

注) 部材寸法等は実測値ではややばらつきがあり、また、断面寸法は実測することができない部分も多かったので、各寸法は本稿では建設時の設計図に記載されている寸法を参考にした。また、各種機について、後世の改造は含めず、建設時の状態について述べることとする。

位置図



記録写真



No. 1 旧貨物引込線の両側に建ち並ぶ倉庫
(右手前から1号～6号倉庫、左手前から7号～12号倉庫)



No. 2 倉庫正面（手前から1号～6号倉庫）



No.3 倉庫背面（手前から9号～12号倉庫・北西から）



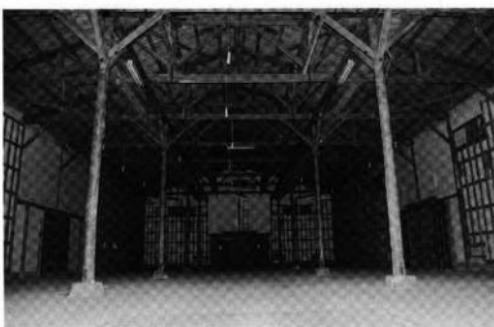
No.4 倉庫背面（手前から12号～7号倉庫・北東から）



No.5 倉庫正面（7号倉庫）



No.6 倉庫側面（6号倉庫）



No.7 1号倉庫内部



No.8 1号倉庫内壁（漆喰壁、荷摺木）



No.9 7号倉庫内部



No.10 7号倉庫内壁（板壁、荷造木）



No.11 2号倉庫内壁解体状況(内壁の下地と筋かい)



No.12 2号倉庫内部架構



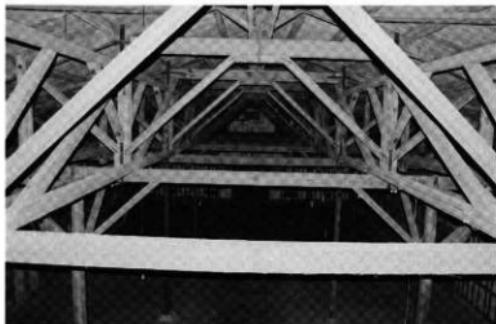
No.13 2号倉庫内部架構



No.14 2号倉庫内部架構



No.15 2号倉庫内部架構



No.16 2号倉庫小屋組(クイーンポストトラス詳細)



No.17 2号倉庫小屋組詳細



No.18 2号倉庫小屋組詳細



No.19 2号倉庫小屋見上げ



No.20 2号倉庫上層木屋組



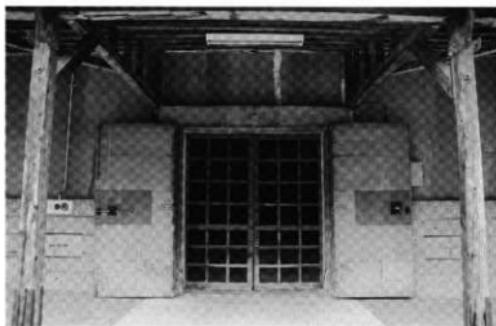
No.21 2号倉庫上屋根小屋組



No.22 2号倉庫上屋根小屋組



No.23 下屋



No24 出入口扉



No25 出入口ねずみ返し



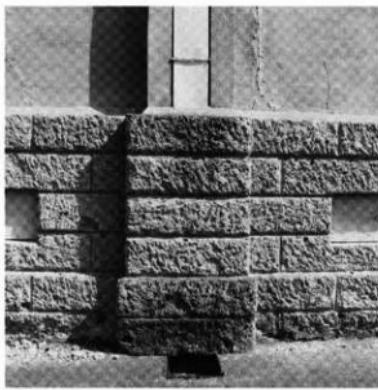
No26 屋根妻部詳細



No27 屋根解体状況



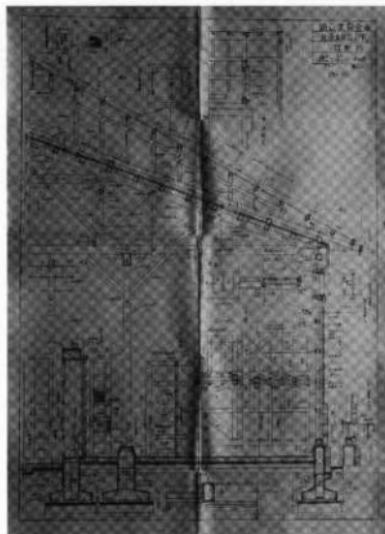
No28 谷樋と脛檼



No29 脣檼と秋保石張腰壁

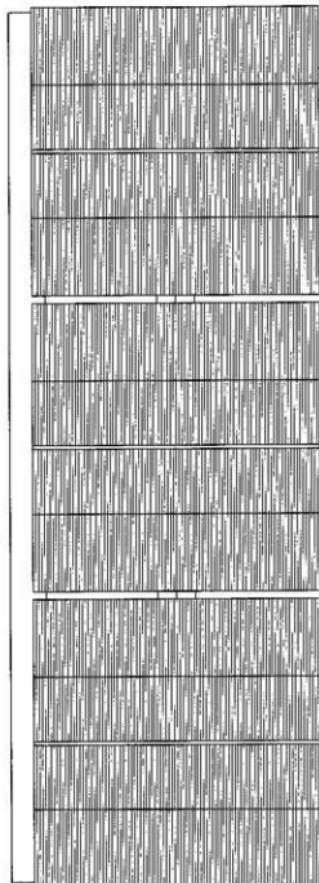
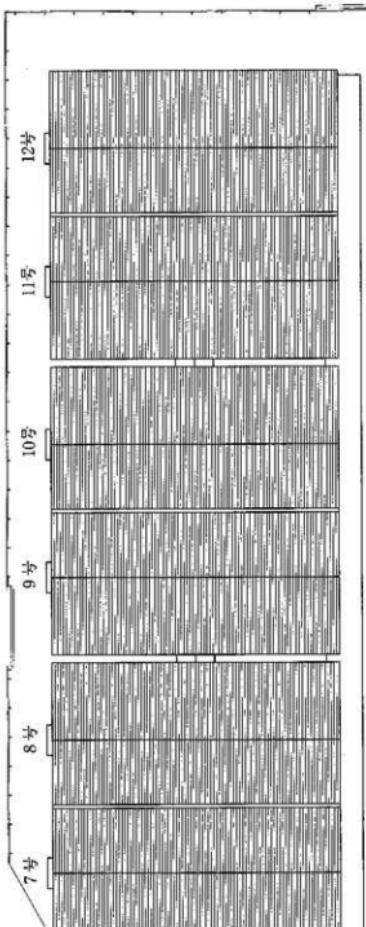


No.30 腰壁



No.31 矩計図（「建設工事設計書、設計図」より）

実測図



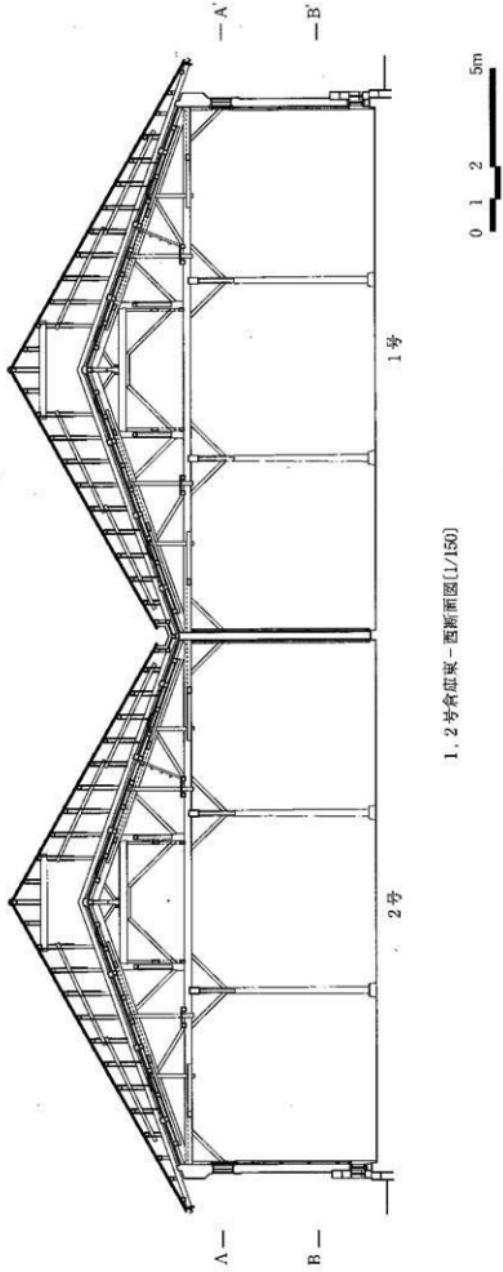
配図(1/600)

20m

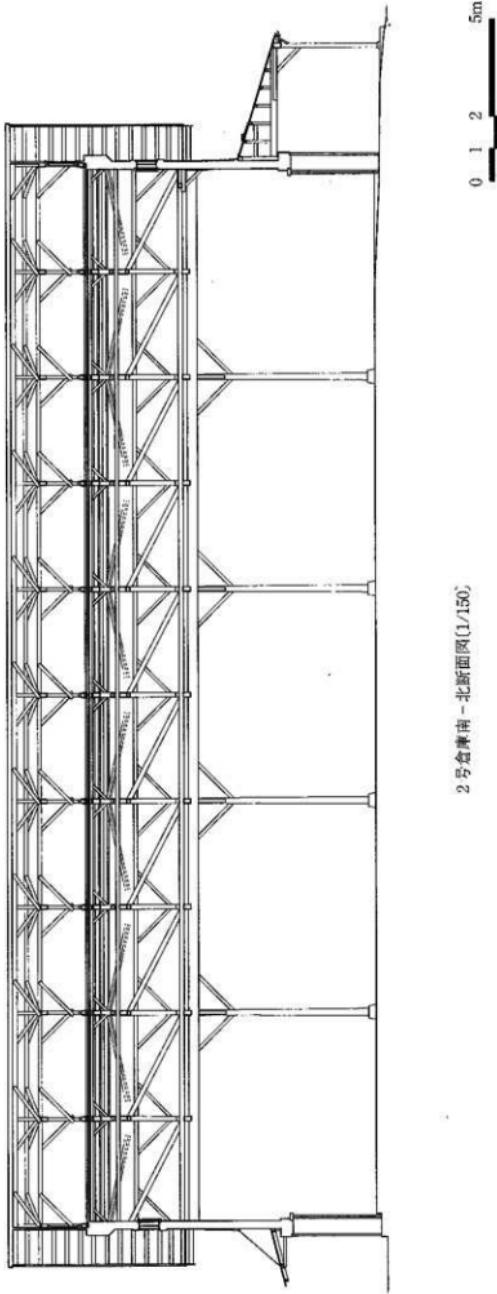
0 5 10



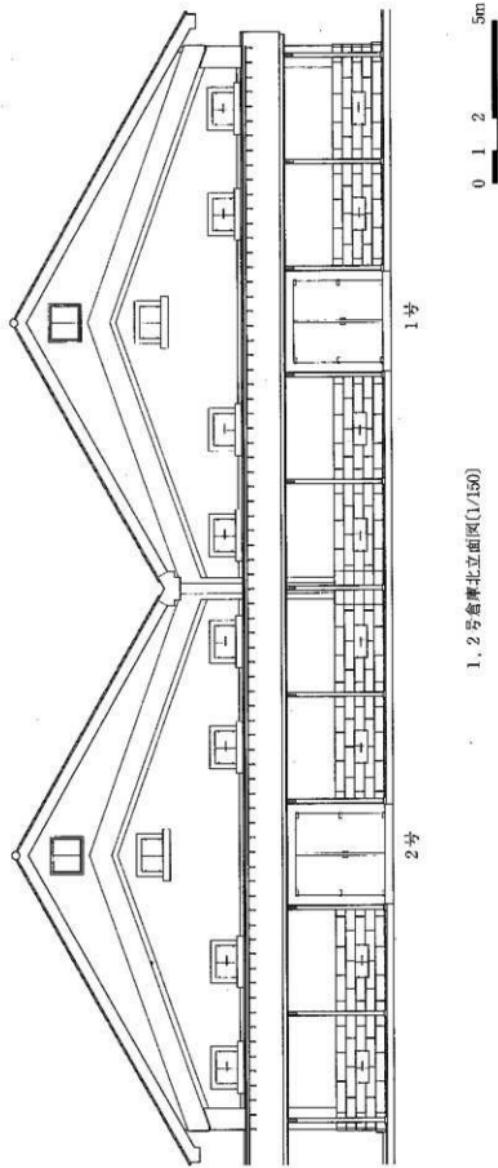
2号仓库平面图(1/150)



1, 2号仓立体—西断面图(L/150)

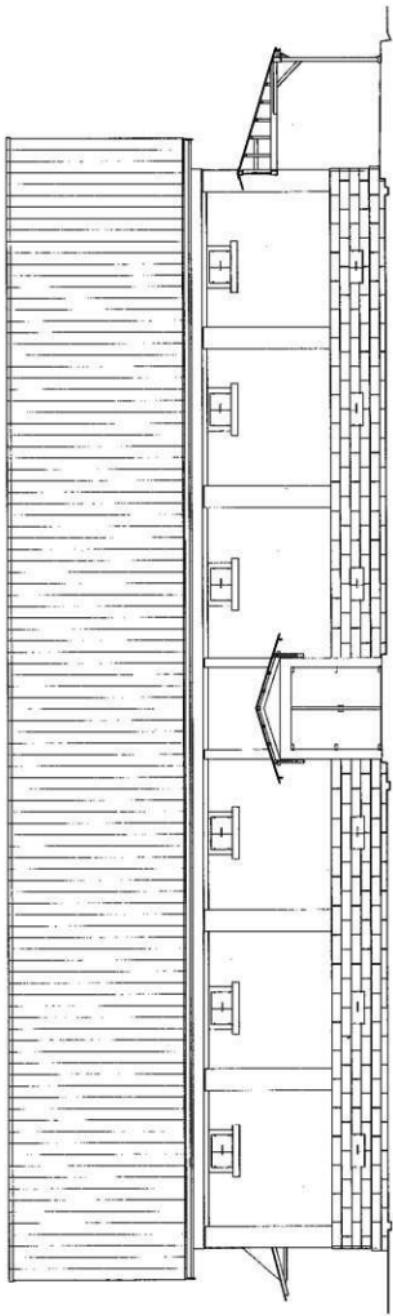


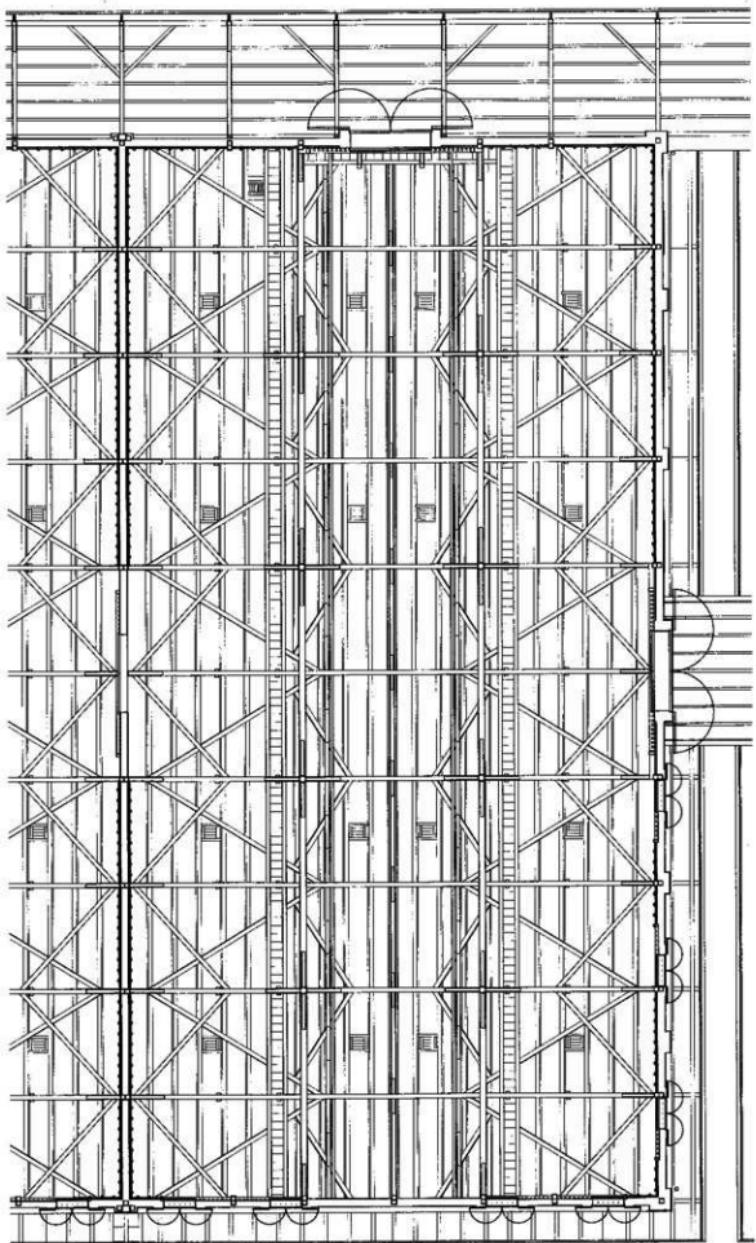
2号倉庫南 - 北断面図(1/150)



0 1 2 5m

2号仓库纵立面图(1/150)





A - A' B - B' 2号合座天井底图(1/150)
Z

仙台市文化財調査報告書第351集

仙台政府倉庫建造物調査報告書

2009年3月

発行 仙台市教育委員会
仙台市青葉区瓦町三丁目7-1
文化財課 022(214)8892

印刷 遠山青葉印刷株式会社
仙台市青葉区本郷通二丁目5-24
TEL 022(272)7371

